

527
-489
38

改行

課題
18行

3.165P-1/2

改編 小井 447

ニてはやX
力徳を認め
合分

604年
17条の憲法

下げる

第六十二章

時代の圧縮

↑↑↑↑↑ ずつと後代、七世紀初頭の頃、

① ↑↑↑↑↑ 日辺日本国（近畿・中国地方）の倭王

口等与刀弥々大王に追って詳述するように

自ら退位して「東宮」（皇太子）となる

聖徳太子の毅然とした決意により、

ついに二朝時代が廃止された。

② 次いで天照大神の直系の子孫が天皇であるとす

る万世一系の思想に基づき、日本の本来の

歴史を大きく改める日国史編纂事業が開始

された、

と推察される。（第1表参照）

ここに、大きな問題となったのは、

へ実際には並列に存在していた東西二つ

の朝廷（第一期二朝時代）を、どのように

て一本化するか✓

ということだったのではなからうか？ * 尚、第二期二朝

時代以降について、後述したい

これは難題である。

雄略朝末年（四八九か）〜武烈末年（五二七

か）迄は、三十八年間ほどだったと

思われる。（第1表参照）

531
 529 527 ちせい 1428
 490-491 治世 世を治める期間
 491年 37 36
 3.165 P-7/2
 新×(D)未発表
 心神前も引き上げ
 ある、

19
 × 2
 38
 38
 × 2
 76

④ 世に十五とす。欽明朝もかなり圧縮する。

③ 一方、治世三十六年程もの長期にわたる前
 期継体天皇の御世を、1/3はかり削除して、治

② 次に、飯豊天皇の御世(十一年間)を抹
 消する。

① まず、応神天皇以降、雄略天皇までの
 各天皇の年代を、実際よりも(記よりも)大
 幅に引き上げる。

日本書紀の執筆者達は、熟考を重ねた
 概略、以下のように対処したのである。

ところか、
 東西二つの時代を連続的に直列につないで
 へ三八年十三八年一七六六年
 と述べるのでなく、何と、
 東西二つの時代をそれぞれ半分程に圧縮し
 たのち、連続的に直列につないで、およそ
 へ一九年十一九年一三八年
 といった具合に述べなければならぬのである。
 当然、となから、相当な無理を強行しな
 ければ、枠から大きくはみ出してしまう。

紀下543に又の所
五世の所 紀下18

3.166P

直列につなぐ前頁

八人の元
編年 2006

みつぎ
継体天皇

紀下
18P 2行

⑤ そーて、並立してゐた二朝時代を、あたかも一
朝の世が続いてゐたかのように繋ぎ合わせる
⑥ また、必然的に生ずるギクシャクした継ぎ目
を覆い隠すため、
武烈天皇に継嗣無く、止むなく越前国が
継体天皇を迎えた
と述べる。
⑦ こうして、東と西と同時に存在してゐた
二朝の世を、無理やり一直線状の短
い枠内に押し込めたのだらう
と想到される。
*
⑧ とはいえ、従来から指摘されてゐるように
武烈天皇崩御の後、
五世の系と述べるだけであつて、
明記に「明示され」てゐない
継体天皇が、
越前国から
迎えられ、王位についた
と、
というのには、あまりにも不自然極まりない
本書記し(下)日本古典文学大系、岩波書店
四三頁、補注一七一(二参照) 一八頁、注三
⑨

1じうろ959¹
みあな村 紀上514¹ 紀下20¹ 対岸¹ 3,167¹

編者 2003¹ あくま 小林 853¹
悪虐な暴君¹
日本史 881¹ 武烈天皇¹

さうにまた、不審な思われることは、
へ日本書紀の編纂者達が武烈天皇を、
徹底的に扱き下ろし、悪虐な暴君として描写
している。✓
という点である。
もし仮りに、たとえ武烈天皇が、日本書紀
に記されている通り、残虐な暴君であつたとしても
へ真の歴史を逐一如実に記録した歴史書
でなく、事実を基にしていゝとはいへ、理
想の追求を目的とした歴史書で正史、日本
書紀において、聖徳仁徳天皇の尊貴な血筋
を受け継いでおられる武烈天皇を、本来、そ
うなにも悪様に記述すべきでない。
と思われ。○
それでは何故、日本書紀の筆者達は、武
烈天皇という漢風諡号を与え、その所業に
ついて悪舌の限りを尽くしたのだろうか。
恐らく、継体天皇の血を引く後代の天皇に
とつて、武烈天皇のこのことを良く書く訳
に、いかなる何か大きな理由があつたもの
であらうと思われ。

2904^{P-1/2}
2908^{P-1/2} 紀下542^P 注23
2908^{P-1/2} 紀下542^P 注23

3,169^{P-1/2}

紀下542^P H28.3.8
注23 4271た ⑥
2908^{P-1/2} 15

中国のこと

紀下542^P
2908^{P-1/2} 68行

化^カす^スる^ルた^タめ^メに^ニも^モ、
へ^ヘ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スは^ハ「^{キヤウキョウ}狂暴^{キヤウキョウ}こ^コの^ノ上^ノも^モな^ナい^イ君^{クニ}主^シで^デあ^アつ^ツた^タ」
と^ト書^カき^キし^シる^ルし^シた^タか^カつ^ツた^タの^ノだ^ダら^ラう^ウ」
と^ト推^ス察^{サツ}さ^サれ^レる^ル。
■^ナあ^ア、^ブ武^ブ烈^{レツ}紀^キに^ニき^キり^リに^ニ見^ミえ^エる^ル武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スの^ノ
暴^{ボウ}虐^{キョク}を^ヲ示^シす^ス記^キ事^ジに^ニつ^ツい^イて^テ、^ツ津^ツ田^{テン}左^サ右^ウ吉^{キチ}氏^シは^ハ「
尚^{シヤウ}書^{ショ}」^リ呂^リ氏^シ春^{シュン}秋^{キウ}史^シ記^キ」^リ列^{リョク}女^{ニョ}伝^{デン}等^{トウ}々^々に^ニ「
國^{クニ}の^ノ暴^{ボウ}君^{クニ}の^ノ桀^{ケツ}王^{オウ}・紂^{シュウ}王^{オウ}の^ノこ^コと^トと^トして^{シテ}記^キさ^サれ^レて^テ
い^イる^ル辞^ジ句^コか^カら^ラ造^{ゾウ}作^{サク}し^シた^タも^モの^ノ」
と^ト述^{シュツ}べ^ベて^テい^イる^ル。
た^タと^トす^スる^ル日^{ニッ}本^{ポン}書^{ショ}紀^キの^ノ記^キ述^{シュツ}内^{ナイ}容^{ヨウ}か^カら^ラ見^ミて^テも^モ、
ま^マた^タ仁^ニ徳^{トク}天^{テン}皇^スの^ノ系^{ケイ}統^{トウ}が^ガ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スで^デ絶^{タツ}え^エ
へ^ヘ仁^ニ徳^{トク}天^{テン}皇^スを^ヲ「^{キヤウキョウ}堯^{キヤウ}・舜^{シュン}の^ノよ^ヨう^ウな^ナ」
聖^{セイ}帝^{テイ}と^トし^シて^テ扱^{キョク}う^ウ一^{イチ}方^{ホウ}、^ブ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スを^ヲ「^{クニ}國^{クニ}を^ヲ滅^{メツ}ぼ^ボ
し^シた^タ桀^{ケツ}・紂^{シュウ}の^ノよ^ヨう^ウな^ナ」^{キヤウキョウ}暴^{ボウ}君^{クニ}と^トし^シて^テ記^キす^ス、^ニと^トい^イ
う^ウ中^{チュウ}國^{コク}風^{フウ}の^ノや^ヤり^リ方^{ホウ}が^ガ用^{ヨウ}い^イら^ラれ^レた^タこ^コと^トは^ハ十^{ジュウ}分^{ブン}考^{コウ}
え^エら^ラれ^レる^ル」^ニと^トい^イう^ウ。^ニ「^{ニッ}日^{ニッ}本^{ポン}書^{ショ}紀^キ」^ニ下^カ日^{ニッ}本^{ポン}古^コ
典^{テン}文^{ブン}学^{ガク}大^{ダイ}系^{ケイ}、^ニ岩^{イワ}波^ハ書^{ショ}店^{テン}、^ニ五^ゴ四^シ二^ニ頁^{ゲツ}補^ホ注^{チュ}十^{ジュウ}六^{ロク}一^{イチ}
二^ニ三^{サン}参^{サン}照^{ショ}。第^{ダイ}四^シ十^{ジュウ}八^{ハチ}章^{ショウ}へ^ヘ仁^ニ徳^{トク}天^{テン}皇^スの^ノ陵^{リョウ}」^ニの^ノ項^{キョウ}
に^ニお^オい^イて^テ既^キ述^{シュツ}」
な^ナる^ルほ^ホど^ド」
へ^ヘ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スは^ハ東^{トウ}の^ノ日^{ニッ}本^{ポン}国^{コク}」^ニ（^ニ近^{キン}畿^キ）
の^ノ天^{テン}子^シ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スは^ハ東^{トウ}西^{セイ}二^ニ朝^{テウ}間^{カン}の^ノ戦^{セン}い^イに^ニ破^ハれ^レた^タ」
の^ノ天^{テン}子^シ武^ブ烈^{レツ}天^{テン}皇^スは^ハ東^{トウ}西^{セイ}二^ニ朝^{テウ}間^{カン}の^ノ戦^{セン}い^イに^ニ破^ハれ^レた^タ」

下

3,169^P-2/2

を戒められた。そこで、桀・紂のような暴君
として記された。という事なのかも知れない。
■では次に、第一期二朝時代の東西二朝間の
激突の様子を見てみることにしよう。

*